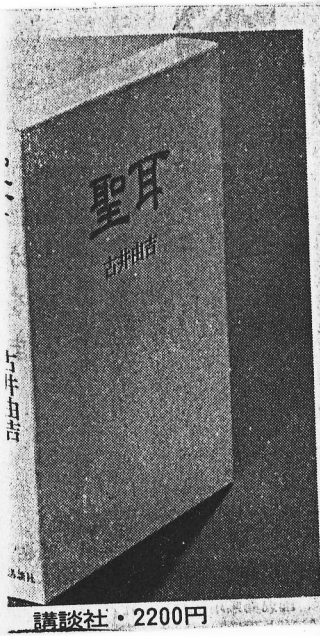
「聖耳」　古井 由吉著

深い淵に横たわる始源の世界

古井由吉の作品を開くたびに、生半可な知識や倫理の無能さを思い知らされる。通常の《読む》行為ははねのけられ、生理や感覚の波にどれだけじっと向きあえるかがすべてのような気がしてくる。この十二の短編からなる作品集はそんな彼の特質がより瑞々しく息づいている。それは網膜の手術と肉親の死、そして還暦を越えた自身の年齢から来る「いずれにせよぎりぎりの境に入るその前に、おそらく秒刻みになる直前」（『火の手』より）という状況からくるものなのかもしれない。

「窮地に追いこまれた人間には、世間の休息そのものが、我身の破滅をふくんで時間がしばしば停滞しているようで、おそろしいのかもしれない」（『朝の客』より）。私たちの何気ない日常、そこにはとらえ方を異にすれば固唾をのむほどの深い淵が横たわっている。「最期の息はすべて唄となって残るものなのか。生きる者にときおり取り憑く、あたりに舞い踊りおもむろに寄り集まるような恍惚はすべて、死者たちの息のなごりに触れてか」（『知らぬ唄』より）。目と耳に入るものを中心に、その極限で日常は一変し、呼吸音や幻覚、記憶が錯綜し、不気味な連結がなされる。のどかな光景は薄闇となり、饒舌な喧騒は死者たちの気配に満ちた沈黙へ姿をかえていく。「風景が日々に変わりもなく映るのは、人の心身が日々にほんのわずかながら改まる、そのきわめて微小な更新によることではないか」（『晴れた日』より）。無意識に日頃、受容している関係は反転し、認知されている外界が実は内部の不安定をなだめ、均衡を保たせていることが見えてくる。ではそれさえゆらぎ、安穏とできなくなった先には何があるのか。「もはや隠すも露われるもない。偽りも真実もない。内も外もない。我身のものではないかのように突き上げる」（『聖耳』より）。静けさと、まるで子宮の中へでもかえったような始源の世界が待っているだけである。作家は深遠な領域へ、また一人で踏み込んだ。

評・宮本誠一（小規模作業所「夢屋」代表）